式辞（平成24年度）

平成24年度卒業式にあたり、お祝の言葉を申し述べます。卒業生の皆さん、おめでとうございます。皆さんのこれまでのご努力に対し、心からの敬意を表します。

また、本日ご列席いただいているご家族の皆様方にもお喜びを申し上げます。皆様方のご支援がなければ、本学も学生もこの日を迎えることはできませんでした。篤く感謝申し上げます。

2年前の東日本大震災以後の社会的、政治的混乱は大学をも揺さぶり続けてきました。以前であれば、大学はいかにして社会的混乱から身を遠ざけ、超然として日常を維持するか、が問われたわけですが、こんにちの大学は、むしろ、その混乱のなかに身を置き、社会と共に揺さぶられながら、混乱そのものを取り込んだかたちで新たな日常を形成することが求められています。本学も、その方向で努力してまいりました。皆さんの大学生活も、いろいろな意味で、社会と共にあることを実感されるものだったと思います。この経験を社会で生かされるよう、そしてそれぞれの立場で日本の復興と再生に貢献してくださるよう、希望します。

さて、昨年のロンドン・オリンピックで日本代表選手が史上最多のメダルを獲得したことはまだ記憶に新しいところです。その後、繰り返し、日本人メダリストの活躍ぶりがテレビで放映されました。昨近の日本の沈みがちな雰囲気を高揚させ、国民に感動と勇気を与えてくれたという意味で、彼らが大きな功績を残したことは否定できません。メダリストたちの幸福そうな笑顔に、私たちは心からの賞賛と祝福を贈ってきました。

しかしながら、実人生における感動は全く別物だということをここで申し上げたいと思います。スポーツは相手に勝つためのもので、相手頼みといった側面を否定できません。たまたま相手が自分より格段に優れていれば、どうあがいても勝てないのです。しかし実人生においては、戦う相手は自分自身に他なりません。そして自分との闘いは、スポーツにおけるよりもはるかに苛酷で厳しいものです。しかも、たとえ勝利しても、他の誰かがほめてくれるわけでも、感動してくれるわけでもありません。本学が誕生した1886年のその同じ年にアメリカでEmily Dickinsonという女流詩人が亡くなりましたが、その人の詩に「大声あげて戦うのはとても勇ましい／だが胸の中で苦悩の騎兵隊と戦う者は／さらに勇敢だ／その人が勝利を得ようと国民は目を向けず／たとえ倒れようとだれも注意を払わないけれど」という一節があります。胸の中の苦悩は騎兵隊ほどに多数で頑強です。しかし私たちはその戦いを勇敢に戦い抜かなければなりません。それが生きるということだということを、ここで申し上げたいと思います。

本学が誕生したのは1886年だと申しましたが、その9年前の1877年に、クラーク博士が札幌農学校を去るにあたり、馬上から‘Boys, be ambitious.’との訓示を行ったとされています。この‘Boys, be ambitious.’は一般に「少年よ、大志を抱け」と訳されているようですが、そしてそれは特に間違っているとは言えませんが、ambitiousのニュアンスをよく伝えているとは言い難いものです。たとえばShakespeareはその作品のなかでambitiousを40回、その名詞形のambitionを52回用いていますが、そのほとんどが、「上の者を蹴落として権力の座につきたがっている」といった意味合いで用いられています。つまりambitionは本来、「野心」あるいは「権力欲」という意味であって、それはマイナスのイメージが大変に強いものです。こんにち、一般的な意味でこの言葉を使うときも、このマイナスイメージを逆手にとった誇張的な表現となります。クラーク博士の言葉もそうしたもので、博士は「少年よ、野心家たれ」と言いたかったものと思われます。博士があえてマイナスイメージの言葉を使ったのは、当時の厳しい状況のなかで生きてゆくのは、きれいごとではすまされないのだと言いたかったものと思われます。当時の札幌農学校には男子生徒しかいなかったので‘Boys’という呼びかけになったわけですが、当時、そしてこんにちであっても、ambitiousであることを求められているのはむしろ女性であるかもしれません。この僅か9年後に、職業によって女子の自立を促すことを根本理念として本学が発足したことを思えば、この言葉は本学の卒業生に向けられたものと考えることもできます。上の者を蹴落とせとは言いません。しかしながら、「大志」といったきれいごとの言葉では済まされない世界がこれから皆さんを待ち受けているのだということを心に銘記してください。そして、自分なりの野心を持っていただきたいと思います。

厳しいことばかりを申しました。しかし、どんな状況にあっても、希望は必ずあります。Emily Dickinsonの別の詩にも、希

望を小鳥にたとえて、「希望とは翼のあるもの――／心の奥の枝にとまって／言葉のない歌を歌い／決して歌い止むことがない」とあります。皆さんも自らの心の中の希望の歌に耳をすませながら、これからの人生を力強く生きていってほしいと思います。

終りに、改めてご列席のご家族の方々にお祝いと御礼を申し上げ、卒業生の皆さんの今後のご健康とご活躍を祈念し、式辞といたします。

平成25年3月15日

共立女子大学
共立女子短期大学
学長 入江和生